

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 16 日現在

機関番号：13501

研究種目：若手（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21730617

研究課題名（和文） 死と生の教育史—近代イギリスにみる子どもと死をめぐる言説群—

研究課題名（英文） History of Life and Death Education: Discourse of Death for Children in Modern England

研究代表者

秋山 麻実（AKIYAMA ASAMI）

山梨大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：90334846

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は、以下の二点に集約される。第一に、本研究では、19世紀を中心に多数出版された宗教小冊子で扱われる死のテーマについて、その構造を明らかにした。そこには、忍苦と信仰、幸福な死を描くと同時に、残された者の喪の作業とグリーフ・ケアという側面も含まれていた。第二に本研究は、そうした小冊子が生まれてきた系譜について明らかにした。これは17世紀宗教改革後に著された多くの宗教書との関連において捉えられるべきであり、そうした大人のための宗教書と、子どものための本との内容的な一致点と相違点を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research has found the structure and the genealogy of the widely read death-bed stories in England from 17th to 19th century. Death was a significant moment of faith as it was a process of pain, belief in the Saviour and the true happiness in the eternal life. The death-bed stories contain not only such elements but also the work of grief care. This research also has found that such a structure of death-bed stories can be pursued up to the 17th century, as they were drawn from the religious books for adults which was based on eagerness of reading as an important way of faith.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 2010年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2011年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 3,200,000 | 960,000 | 4,160,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：イギリス教育史・死生学・児童書・宗教改革・幽霊譚

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初、死と生に関する研究にはふたつの傾向があった。一方では、医療と死の迎え方を問うという傾向である。これは、大きく分けると、高齢化社会を迎えるなかで終末期医療のあり方を問うという課題と、臓

器移植やそれに伴う死の判定に関わって医療倫理のあり方を問うという課題を包含するものだった。これらの課題に対する基礎的研究として、歴史的・宗教的背景についての目配りも含めて、「死生学」分野の研究が進んでいた。そこでは、生について決定するのは誰かという問いが基盤にあり、医療機関が

これまで司ってきた生についての権利、具体的には脳死判定や、終末期医療のあり方を考え直し、それを神の領域に戻すというよりは主体的人間の領域に戻すという方向性が追求されてきている。特に死に方を含めて主体的に生き方を決定するという患者のあり方と、その権利を保障する医療のあり方が重視されている。

もう一方の傾向としては、学校内外の現場で、子どもたちに対して「命の教育」を行なうという課題への着目があった。命について考える授業は、保健体育領域では性や命の誕生、薬物等と関連してこれまでもあったが、生活科や総合的な学習の時間など、さまざまな機会を利用して、末期ガン患者などによる授業が行なわれるようになってきた。

すなわち、自身の生に関する主体的な決定という考え方に基づいて死と生について語ると同時に、生命をおろそかにしないことを子どもたちに求めるという構造が生まれてきたのである。死を自身に起こり得ることとして捉えることで、生を律するという語り口自体は、信仰に関わって散見される。しかし、それが個人の生の充溢をうながすとともに、暴力や非行の防止を目的とすること、またそれが学校という場で行われることによって、死に伴う深い闇や不安を、「命の大切さ」という予め設定された結論へと転じてしまう。

こうした安易な転換の妥当性を検討するためには、私たちが歴史的に、死をどのように次世代へと伝えてきたのかという問題を明らかにすることが不可欠であった。

2. 研究の目的

こうした状況を受けて、死について子どもに伝達するということは、歴史的にみてどのような要請であると捉えるべきなのかということを考えることが、本研究の大きな目的となる。

ムシや小動物の死と、飼育動物の死、ペットの死についての考え方、感じ方、子どもへの伝え方はそれぞれ異なるはずであるし、保育・教育の現場では扱い方が異なるはずである。また、人間についても、報道等を通じて知る他者の死と、友人・知人の死、親戚の死、家族の死はそれぞれに感じ方が異なる。こうした実践的なことがらをどのように捉えていくかということの根本には、私たちが文化的に、とりわけ教育において、死をどのように捉えて伝達してきたのかという基礎的な知が蓄積されていなければならない。

とりわけ、死について語るときに、あまりに直裁に「命の大切さ」を知るという課題へと横滑りさせる傾向は、どのような系譜において起こっていることなのか、そのさいに私たちが取り残してしまう問題は何かのと

いうことについて考える必要がある。

本研究では、そうした課題を視野に捉えながら、そのための基礎研究として、近代における、大衆を視野に入れた文字伝達を基盤にした教育において、死がどのように語られたかを明らかにしようという目的をもっている。とりわけ、19世紀に多数出版される、死を徹底的に語ろうとした宗教的小冊子を中心に、その傾向と経緯、課題について明らかにする。

3. 研究の方法

研究の発端は、19世紀に日曜学校等で配布・斡旋されたといわれる宗教的小冊子にあった。本研究では、まず、こうした小冊子の内容に踏み込み、死と生の語られ方の傾向を明らかにした。19世紀に出版された宗教小冊子および回覧等に供された冊子類を中心に、手紙、雑誌記事などによって、死の語りを総合的に捉えることとした。

さらに、こうした小冊子の経緯を探ることが次の課題となった。17世紀、宗教改革の影響を受けて多くの宗教書が出版されるなか、文字を覚えて簡単な文章が読めるようになるための教育を子どもに施すことが必要となる。本研究では、そうした文書のなかでも20世紀に至るまで再版された文献に着目した。17世紀には大人のための宗教書が数多く出版されていたため、なるべく多くの宗教書を調査する必要がある。そのうえで、そうした大人のための宗教書と、子どものための文献とを比較検討した。

ブリティッシュ・ライブラリーの図書目録を中心に史料調査を開始したが、18世紀以前の史料についてはEeboのデジタル史料が、かなり網羅的に宗教書を収録しており、それらを活用して、上記の研究を行った。

4. 研究成果

主な研究成果は、以下の二点に集約される。

(1) 宗教的小冊子の構成・傾向について。1966年に出版されたEdward Gorey著 *The Pious Infant* (邦訳『敬虔な幼子』)は、美しい装丁で出版された大人のための絵本であるが、その内容は、敬虔な男児が、いかに優れて信仰篤い生を送り、周囲の子どもたちに影響を与え、4歳でふとしたことから健康を害した後も信仰を捨てることなく、幸福な死を迎えたかを描くものである。この物語構成に加えて、4歳の男児を描いたかわいらしい絵が善行ばかり積み重ねる様子は、奇異な印象を醸し出す。本研究は、この不思議な印象を与える物語が、実は19世紀に数多く出版された宗教小冊子とほとんど同一の物語構造を有していることを明らかにした。その

さい、物語の要素として焦点化されたのは、死は誰にもいつでも訪れるというメント・モリのメッセージの前提を基盤としているということ、そのため、小さな子どもの死の例示こそが、子どもに信仰を促すための有効な方法とみなされていること、そして信仰と懺悔こそが死後の永遠の生を幸福なものにするという救済の原理を物語のなかで伝えていることである。

19世紀には、こうした物語が、小冊子のかたちをとって多数出版された。それらは宗教小冊子だけでなく、私的な回覧や配布を目的として自費出版されたものも含む。こうした幸福な死の物語は、宗教教育書として活用されたものであるばかりでなく、幼くして亡くなったわが子が、永遠の幸福を得たのだという、両親や近親者への慰めともなっている。

また、物語として描くことで、子どもの死を他の子どもたちの信仰に役立てたいという思いが表現されるのだが、これらは、もちろん信仰篤い両親・近親者としての公的に表明できる部分の思いである。19世紀にはすでに、子どもを失った悲しみや、それについての慰めを描いた記事などが印刷されており、子どもを失った傷が、永遠の幸福という物語で単純に癒されるわけではないことがうかがわれる。

実は、作者が本当に両親や近親者であったかどうかというのは確認不可能な文献も多い。というのも、こうした子どもの死を扱った物語は、宗教小冊子であれ自費出版であれ、いずれの場合にも、著者の名前が明らかにされず、「父」「母」「おじ」「おば」「家庭教師」といった名前で記されているものが多いからである。これらの曖昧な著者名は、有効な小冊子を作成しようという意図のもとでは、現実には起こらなかったことを物語として提示した可能性を示唆する。一方で、回覧された冊子の場合には、それが悲劇の物語を読む楽しみに供された可能性は否定できないけれども、実在の子どもの死を書きとめて残しておきたいという気持ちがはたらいたとも考えられる。しかし、いずれの場合も、その物語構成は驚くほど類似するものばかりである。このことから、信仰に支えられた幸福な死という物語は、幾度も繰り返されたが、そのさい子どもの死は、子どもの宗教教育と密接に結びついていたと同時に、最終的には遺族の感情を帰結させる点として示されていたこと、そのために、私的に回覧された物語であっても、他の新聞や雑誌の記事のなかで子どもの死とともに描かれるような感情の吐露は、ここでは控えめにしか表現されなかったことがわかる。

これらのことは、ブリティッシュ・ライブラリーを中心とした図書目録ならびに18世紀以前の歴史資料のデジタル文書 Eebo など

から、かなり網羅的に19世紀の子どもと死の文献を調査することによって可能となった。

本研究では、こうした子どもの死の物語の内容構成そのものを明らかにしただけではなく、この公的に表明された「敬虔な」死の物語が、人間の思いを取り残すかたちで成立したことも指摘できた。

(2) 本研究では、第二に、こうした小冊子の系譜について明らかにした。そのきっかけは、19世紀に少なくとも12回の再版を重ねた宗教小冊子 *A Child's Memorial: A New Token for Children* (1857) のなかで、敬虔な主人公の少女の読書歴として、『天路歷程』などと並んで James Janeway 著 *A Token for Children* (1672) が言及されていたことに端を発する。後者は、タイトルに見られるように、前者に着想を得ているし、物語の構成は非常に似通っている。しかし、死にゆく子どものモデルはまったく異なっているし、描写は詳細で、物語は長い。この *A Token for Children* は、子どものために書かれた物語の端緒とも言われるものである。18世紀から興隆する、子どもに教訓的でありかつ面白い物語を提供しようとして出版されることとなった子どものための本とは一線を画し、この本にはいわゆる楽しみの要素はまったくないといっている。しかし、子どものために書かれた、子どもを主人公とした物語が、まさに子どもの死をテーマとして開始されたということ、またそれが、宗教改革後の、信仰の基盤として読書による学びを求める風潮を背景として、文字を媒介とした子どもの宗教教育のために出版され、以後 Cotton Mather の手になる同様の物語と組み合わせられた版なども交えて、子どもの死と信仰についての教育的な物語の要として位置づけられ、20世紀にいたるまで出版され続けたということは、記憶にとどめるに十分に価値あるものである。

Janeway 自身は非国教会系の聖職者であり、犯罪者の告解と回心のプロセスに関する著作などを手がけていた。 *A Token for Children* は、敬虔な子どもたちが死ぬ物語の短編集であり、大人向けの宗教書で類似の短編集は、管見の限りではない。しかも、多くの宗教書では、重要なテーマの例示は聖書の内容を示すことによって行われており、実生活上の例示がテーマの正しさを立証するものではなかった。そのなかで、大部な宗教書である Isaac Ambrose 著 *Prima, Media, and Ultima* (1650) では、ある子どもの死を描いていた。しかも、Janeway はその物語を簡略化して利用し、短編のひとつとして組み込んでいた。しかし、Janeway の編集の仕方、早世した子どもが並はずれて敬虔であったこ

とを示すエピソードは大胆に省略し、学校で熱心に宗教を学んだことを強調するものであり、その意味で、どのような子どもでも、信仰と幸福な死を自身のこととして考えることができるようにという意図のもとに編集されていた。

実は 17 世紀には、子どもが病を得て亡くなるまでの間に、周囲の人間が驚くような聖性を帯びる物語も出版されている。一方で Janeway の本は、すべての子どもが実践可能な信仰を促すために、一般化されうる死の場面が収録されている。これらを合わせて考えた時、文字を媒介として、子どもの宗教教育をねらいとした語りは、次第に死のもつ神秘的な部分を失っていったと考えられる。すなわち、子どもの生死の経緯のなかで、信仰を促す言語のなかへと回収可能な部分だけが文書化され、そのためにかえって脱神秘化された物語となっていたといえるのである。

このようにして、大人の宗教書の影響を受けながら、子どものための死の物語が、文字を媒介とすることによって脱神秘化することとなったが、ここから、今後の課題が次のように抽出された。

第一に、死のもつ聖性や神秘性、宗教教育のなかでは語りえないものは、どのようなものであったのかを明らかにするという課題がある。子どもの死を扱ったサガ等を紹介した先行研究を参考にしながら、この問題に取り組むことで、脱神秘化のなかで失われたものは何かということが問われることとなる。また、墓碑や文学のなかでの死の扱われ方が、こうした脱神秘化とどのように重なるのかということも、吟味する必要がある。

第二に、そうして脱神秘化された物語が、19 世紀までの時代を通じて、子どもの死を信仰のモメントとして捉える小冊子が多数発行されたわけだが、小説等では、子どもの死という悲劇はさまざまな変奏をもって語られた。これらのなかには、単純に悲劇を楽しむという側面を重視した作品もあるが、そうしたさまざまな言説は、死をめぐる「公式の」見解とはどのような差異をもち、どのように位置づけられたのだろうか。あるいは、人々の日常の死と、どのような距離をもち、何かを隠蔽する語りとなったのだろうか。そうした問題を追及することによって、いよいよ今日、死を語りながら生の大切さへと横滑りする文化がどのように形成されてきたかが明らかになるはずである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①秋山麻実、19 世紀イギリスにおける子どもの死とその伝達、山梨大学教育人間科学部紀要、11 巻、2009、205-215、査読有

②秋山麻実、17 世紀イングランドの子どもの死の物語—James Janeway, *A Token for Children* をめぐって—、山梨大学教育人間科学部紀要、12 巻、2010、168-186、査読有

[学会発表] (計 1 件)

秋山麻実、わたしたちが「生き物」と共に生きること—「科学」と「文化」の接点として、第 1 回現代保育実践・研究〈交流と対話の会〉、2009.9.6、伊東ハトヤホテル

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋山 麻実 (AKIYAMA ASAMI)

山梨大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：90334846

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし